
プログラミング・デス

河野 る宇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プログラミング・デス

【Nコード】

N1359R

【作者名】

河野 る宇

【あらすじ】

*それは決して造られない宝石……どうあがこうとも、その宝石のイミテーションは……ただの『偽物』にしか成り得ない。

小説サイト「野いちご」にも投稿させていただいている作品です。

第1章　遺伝子の揺らぎ

ベリルは数ある家のうちの1つ、オーストラリアの自宅にいた。オーストラリア連邦ノーザンテリトリー準州の首府ダーウィン。オーストラリア大陸北側のチモール海沿いに位置している街である。仕事を終え、数日のんびりしようと買い物を買って済ませてキッチンで冷蔵庫に食材を仕舞っていた。

金髪のショートヘア、後頭部は少し長めで印象的なエメラルドの瞳。年の頃は25歳といった処か。魅力的な顔立ちだ。

ソフトデニムのジーンズに黒いインナースーツ、その上から薄手の前開きの半袖シャツを合わせている。

フリーの傭兵をしている彼は裏の世界では名の知れた人物だ。抜群の戦闘センスと指揮の高さは誰もが目を見張る。

『素晴らしき傭兵』

そんな通り名が付いたのは20歳の時だ。およそ傭兵とはほど遠い容姿だがその通り名にふさわしい人物でもある。

* 深い海の碧・ふかいうみのあお *

食材を仕舞い終え香りの良い紅茶を煎れてティカップを持ちリビングに向かう。液晶テレビをつけ、ノートパソコンを開き紅茶を傾けながらメールを確認。

ベリルは他にもいくつか倉庫代わりの家を世界各地に所有しているが、ここダーウィンの住まいは彼の最も気に入っている場所である。

ゆっくりしたい時はほぼこの家で過ごす。その他は愛車のピックアップトラックで世界各地を走り回る事が趣味の1つだ。

もちろん日本にも住まいを構えている。関東と関西にこちにまりとした一軒家で表札の名前は当然のごとく仮名。

「……」

メールの確認を終えて紅茶をひと口味わいノートパソコンを閉じる。これからの数日間、何をしようかと思考をめぐらせた。

オーストラリアはあらかた回ったがそれでもまだまだ新しい発見がある。

「！」

そんな時バックポケットの携帯が振動で着信を伝えた。

「？」

登録していない番号。仲介の無い依頼か？ ベリルはいぶかしげに携帯を開いた。

< こんにちは >

「誰だ」

聞き慣れない男の声。記憶には無い。

< …… >

「？」

向こうから微かに聞こえる笑い声。何を楽しんでいるのだ？

< あんたに会いたいんだけど >

「……」

ベリルは応えなかった。

<あんたの家の裏庭にいるよ>

「！」

リビングに足を向け裏庭に続く窓のカーテンを開く。そこにいたのは20代くらいの青年。小馬鹿にするような微笑みをベリルに向けて軽く上げた手をひらひらと動かした。

「……」

ベリルは携帯を閉じてガラスの引き戸を引く。傾きかけた日差し、これからオレンジに変わる世界はまだ人々の生活音を大きく響かせていた。

「何の用だ」

「初めまして。かな」

肩に届くほどの金髪。その瞳は深い海を思わせる碧眼^{へきがん}。サンドカラーのカーゴパンツに黒のフライトジャケット。

「……？」

ベリルは何か違和感を覚えた。

「懐かしい感じとか、しない？」

「どういう意味だ」

青年は口の端をつり上げてベリルに数歩、近づく。

「ああ、言い忘れてた。俺の名はフォージュリ。よろしく」

「！」

その名にピクリと反応した。

「もちろん本名だよ」

そう、ベリルが違和感を覚えたのは……

「自分のクローンを見るのは初めてかい？」

「！」

顔立ちが自分に似ていたからだ。

「……クローンだと？」

「驚いたか？」

フォージュリ……彼はそう名乗った。ベリルが何故その名に反応したのか。

『forgery』その意味は『偽造物』。

「知らなかっただろ？ 自分のクローンが造られてた事に」

下品な笑みを浮かべフォージュリはさらに近づく。

「あんたがいた施設。その別棟の地下に俺はいたのさ」

フォージュリはそう言つて表情を一変させた。青年らしい笑顔から何かを企んでいるような不敵な笑みに……

「まさか忘れた訳じゃあないよね？ 自分が『キメラ』だって事……」

……

「！？」

ビクリと体が強ばる。

忘れたくても忘れられない真実——A国で造られた完全な人工生命体。あらゆる人種のヒトDNAを分裂・結合・合成させた唯一の成功例……それがベリル。

15歳の時に施設が何者かの襲撃を受けベリルは施設にいた人々の手によつて逃げる事が出来た。

「別棟に……」

「そう」

フォージュリは自分の知っている情報をゆつくりと見せつけるように語り出す。

ベリルが生まれて1年後、彼を造り出したチームとは別のチームが作られた。

『キメラからのクローン作成』

その目的は定かではないが生まれたキメラの細胞が特殊なものであったためにその計画が持ち上がったのだろう。

「面白いよね。人間の胎内を介さずにあんたを造り出しておいて、今度はそのクローンだってさ。だから俺には『母親』と呼べるものがある」

『お前とは違う』

フォージュリの目は優越感を表していた。

「他にも何人がクローンがいたけど」

その後の言葉を一端、切りベリルにゾクリとする微笑みに向けた。

「俺がみんな殺した」

「！」

ベリルの眉間にしわが寄る。この嫌悪感、吐き気がする……

「施設が襲撃を受けた時クローンの俺たちは隠し部屋にいたから助かったのさ」

「何故……他の者を」

ベリルの問いかけにフォージュリは目を細めて笑う。

＊殺意の在処・さついのありか・

「決まってる。俺以外に必要無いからだ」

「！」

フォージュリはそう言い捨ててベリルを睨み付けた。

「あんたにどれほど会いたかったか……『オリジナル』のあんたにね」

「……」

これは殺意だ。ベリルは肌に伝わるピリピリとした痛みで眉をひそめる。

「笑えるだろ？ フォージュリだって！ 初めから偽物なのは解ってるだろうに、この名前！」

喉の奥から絞り出すように笑い。大きく手を広げ「みんな聞け」というように声を張り上げる。

しかし、その声は上空を通過するジャンボジェットの音にかき消された。

「クローンチームはあんたのチームを羨ましがってた。そりゃそうだ、偽物じゃなく本物を扱えるんだからな」

あいつらが扱えるのはあんたの細胞と俺たちクローン！ 自虐めいた笑い声が長く響く。突然その笑いをピタリと止めてベリルを再び見据えた。

「イミテーションは所詮、イミテーションだってさ。ムカツクよな」

「！」

まずい！ フォージュリの殺意を感じ取ったベリルはすぐに身をひるがえした。

「……っ」

投げられたナイフがベリルの右腕をかすめる。家の中に駆け込み身を潜めた。

「無駄だよ、あんたの気配はすぐにわかる。俺はクローンだからね」

ゆつくりと上がり込みドアに鍵をかけた。

「……」

荒い息を整えベリルは血のにじむ右腕を一瞥^{いちへつ}する。

「！」

すると視界が歪むのを感じた。これは一体……

「さっきのナイフ。少しは当たったろ？ それには麻酔液が塗ってあつたんだ」

「！」

麻酔……？

「うつ」

抑えられない眠気に頭を振る。抗っても意識は遠のいていく……
気配は少しずつ確実に近づいていた。

襲撃から10年以上も経った今になって何故わざわざ殺しに来たのだろうか。確かにベリルは戸籍も出生証明書も無い。それでも生きていけるのがこの世界だ。

ベリル・レジデントとは彼を造り出した科学者が付けた名である。国からはキメラという俗称を付けられてはいたが科学者たちは密かにベリルと名付け呼んでいた。

A国の優秀な科学者が10人集められ、リーダーはベルハース教授。白髪混じりのブラウンの髪に仏頂面の少し威圧感を持つ老齢の男性だった。

彼らはキメラの誕生に喜びつつも自分たちのした事に心に暗い影を落とした。しかし国は生まれた人工生命体の知能の高さに目を付け施設を増設しあらゆる専門家たちを呼び寄せる。

ベリルはそうして勉強する事が『仕事』となった。

「うつ……」

眠気はピークに達し意識は遠のいていく。次に目を覚ました時、一体どういう体勢になっているのか……そんな事を考えながらベリルは目を閉じた。

「見いゝつけた」

反応の無いベリルを見下ろしフォージュリは下品な笑みを浮かべた。

「……」

静かに目を覚ましたベリルは動かずに今の体勢をそのまま確認する。

両手は……後ろ手に手錠をかけられているようだ。足は拘束されていない。装備していた武器もほとんど奪われている。

「！」

首にチェーン？

「おはよう」

「……」

フォージュリの声に目を開く。頭を少し動かすと溶接工場を思わせる建物の中だと解る。フォージュリはパイプイスの背を前にして相変わらずのにやけた顔をベリルに向けていた。

彼の横にはクレーンの操作盤がつり下げられている。大きなものを運ぶための天井につるされたクレーンだ。

ベリルの真上にそれがあり首に巻かれたチェーンがそのクレーンにつながれている。

「……」

ベリルは眉をひそめた。いささか悪趣味な事をするらしい。

「最後に何か言い残す事は？」

「何故そこまでこだわる」

ベリルは体を起こす事なく寝かされたままの体勢で問いかけた。ベリルの問いかけにフォージュリのにやけた顔が無表情に変わる。

「あなたには解らない。毎日毎日、オリジナルがどうか。クローンは所詮クローンにしか過ぎないとか。うるさい」

そして右手で顔を覆い喉から絞り出すように笑った。

「他の奴は他の奴で自分たちはクローンだから仕方がない。みたいな顔しやがって……ムカツクんだよ！」

「……そうか」

ベリルは静かに目を伏せる。

「だからといって」

「ああ？」

付け加えるようなベリルの声にフォージュリは面倒そうな声を上げた。

「だからといって命を意味無く奪う事は許されない」

ベリルは顔を上げフォージュリを睨み付けた。

「……っ」

輝くエメラルドの瞳にゾクリとする。

これが……『オリジナル』か。異様なまでの瞳の輝き。あらゆる人種のDNAが混ざり合い、引き起こした遺伝子の発現^{はっけん}なのか……？

『人間の可能性』

ベリルからそれが垣間見える。しかしフォージュリにとってそんな事はどうでもいい事だ。

科学者たちに馬鹿にされ続けた屈辱。

『所詮は偽物』

その怒りと憎しみを目の前の奴にぶつけられればそれで満足だ。

この美しい『化け物』を醜く殺してやる。フォージュリは凍るような笑みを浮かべた。

「死ねよ」

フォージュリがクレーンの上昇ボタンを押すとベリルの首に巻き付いているチェーンも少しずつ上に持ち上げられる。

「ウ……ッ」

締め付けられて思わず声が出る。自重で首のチェーンがじわじと食い込んできた。

「がっ、あ……っ」

「ククク」

きつく締め上げられ意識が遠のいていく。苦しむベリルを眺めてフォージュリは嬉しそうに目を細めた。

しかし――

「！」

ベリルは後ろ手に縛られている両手を両足を曲げて前に持つていき、その手錠を外して首にかかっているチェーンを掴みクレーンの上に勢いをつけて飛び乗った。

「ゲホッゴホッ……」

チェーンを首から外して咳き込む。

「猿か」

フォージュリは薄笑いでベリルを見上げた。クレーンの下降ボタンを押しながらハンドガンを手にする。

ベリルはクレーンから飛び降りて彼のいる方とは逆に駆けていった。

「チッ」

ハンドガンの引鉄ひきがねを引いたが外してしまい舌打ちをして追いかける。

「もう嫌なんだよ。偽物なんて」

フォージュリの目は血走りぶつぶつとつぶやきながらベリルに迫ってきた。

「……」

物陰に隠れたベリルは少しずつ近づく気配に目を細める。このまま逃げる事は出来ない。奴をなんとかしなくては。

クローン……ベリルは視線を落とした。

そんなものまで造られていたとは……締め付ける胸の苦しみを抑えるように、自分の胸ぐらを掴んだ。

なんのために施設が襲われたのかは解らない。

そして自分を逃がすために犠牲になった人々を思う度——吐き出せない苦しみがいとも彼の胸に痛みを与えた。

死が訪れるまで闘い続けようと心に決めた彼の身はもはや死ぬこと叶わず永遠の時を存在し続けなければならない。

そう——ベリルは不老不死の身になった。そんな運命を彼は素直に受け入れた。

25歳の時に出会った少女から与えられた『不死』……あれからまだ2年しか経っていない。

自分の体がどう変化したのか、彼はまだ掴みあぐねていた。それをフォージュリが知ればどうなるだろうか……

＊虚無の肖像・きよむのしょうぞう・

「……」

ベリルは手にしている小さなナイフを見つめた。ベルトに隠していたものだ。他の武器は全て奪われたが、これだけはフォージュリも見つけられなかった。

「……」

近づいてくる気配を探りながらベリルは考える。奴に手加減は通うしないだろう……苦い顔になった。手加減出来ない相手、それは相手を確実に殺してしまう。という事だ。

それにこれ程ためらうのはやはり……過去の重圧なのだろうか。

「何故だ……フォージュリ」

ベリルは眉をひそめてつぶやいた。

「……」

フォージュリはベリルが隠れているであろう壁の向こう側で立ち止まる。憎らしいほどに感じる気配に舌打ちした。

施設が襲撃された時、その騒ぎに乗じて科学者その他のクローンを皆殺しにしてやった。襲撃してきた奴らから身を隠しながらオリジナルであるベリルを探したが見つからなかった。

12年経ち、ようやく見つけた獲物に狂気じみた笑みが浮かぶ。

「これで俺を偽物だと言う奴はいなくなるんだ」

「偽物だと言う者はすでにいなくてもか」

「！」

言いながらベリルはゆっくりと姿を現した。その落ち着いた様子にフォージュリは少し驚く。

「……余裕じゃないか」

「そう思うか？」

よく見ると手が微かに震えている。それがなんの感情を表しているのかフォージュリは図りかねた。

「お前を偽物だという者は誰1人いないというのに、それでも殺し合うのか」

「うるさい！ あんたがいる限り俺は偽物なんだよ……終らせるんだ」

瞬間——フォージュリは動けなくなった。

「う……っ」

エメラルドに射抜かれている。畏怖^{いふ}の念が心を満たしていった。唇が小刻みに震える。

俺は……勝てないのか？

「そんなハズはない！」

フォージュリはベリルをギロリと睨み付け奥歯をガリリと噛みしめた。激しい憎悪が放たれる。

「！」

それに耐えるようにベリルは左足を踏みしめた。

「……また会おう」

「！フォージュリ！」

ベリルの制止を振り切ってフォージュリは走り去った。

家に戻ったベリルはダイニングテーブルの椅子の背に手について苦い表情を浮かべる。

このまま捨て置く事は出来ない。奴は必ず仕事も妨害してくるだろう。

「クローン……」

ベリルは眉をひそめた。自分の細胞を使ったからかどうかは解らないが確かに動きは似ていた。

わざわざ真似たとは思えない。しかしクローンだからといって必ずしも似る訳ではないはずだ。偶然、同じ動きになったという事だろう。

フォージュリは施設から逃げ出しどんな風に生きてきたのだろうか。あの動きから、ベリルと同じ世界にいただろうとは予想できる。

そしてフォージユリの説明からも彼らはまともな教育を受けていなかったのだと考えられる。

ベリルのように専門的な知識を彼らが学んでいたとは思えない。否、そもそも人としての教育を受けていた事すら疑わしい。

隠されていた実験から生み出された彼らに学ばせるとは到底、思えないのだ。それでも最低限の教育は受けていたのだと窺えた。

それとは逆に全てが優遇された生活がベリルには与えられていた。国はキメラに出来る限りを注ぎ込んだ。

そうまでしたのは、やはり彼の持つ素質に気付いたからだろう。驚異的なスピードであらゆる知識を吸収していく姿は彼らを驚かせたに違いない。

『どこまで吸収するのか』

それを追求したくなるのも当然かもしれない。莫大な予算をつぎ込みキメラに最高の環境を造り出した。

自由はなかったが学ぶこと自体に苦痛はなかった。

しかし——国家最高機密となった研究は姿の見えない敵によって機密情報の奥底に埋もれるように仕舞われる事になった。

科学者たちが名付けた名前……国がそれを知れば彼は再びA国に呼び戻されるのは必至だ。

ベリルはそれに抵抗する気は無い。生まれた場所に戻るだけだ。

A国、正式名称はアルカヴァリユシア・ルセタ——ヨーロッパにある小国。森林が多く常用語はアルカヴァリユシア英語。イギリス英語に近い。街並みはイタリアを思わせる青い空の似合う風景。

陸軍が管理する国家機密の研究施設は森の中にあった。

何故、国家機密だったのか……人の遺伝子を操作し、さらに人工生命体の研究は世界的にも非難を浴びるに足る事柄だからだ。

そしてA国は数々の失敗を繰り返しベリルが生まれた。そのまま細胞の研究が続けられる予定だったがベリルの頭脳はそれ以外も求められる事になる。

希望するほぼ全てを与えられる代わりに広い世界に足を踏み出す

事は許されない。ディスプレイに映される世界にどれほど胸を焦がしても手を伸ばしても触れる事は叶わない。

だが——ベリルは誰かを傷つけてまで自由を得るつもりは無かった。

「……フォージュリ」

つぶやいて苦い顔になる。彼をそこまで憎しみに駆り立てるものはなんだ？

12年という年月はその憎しみを軽減してはくれなかった。そこまでの憎しみを、一度も顔を合わせた事の無いベリルに向けている。それほどに受けていた傷は大きかったのだろうか。それが前に進む力になっているのなら私は憎まれたままで構わない。

だが……アレは前に進む力とは到底、思えなかった。

性格はその環境に影響されて決まるならば、その性格自体を形成するのは……？

「遺伝子発現……」

ヒトの遺伝子についてはゲノムの解読は完了したがその全てを解明出来た訳ではない。遺伝子は情報でしかない。遺伝子が機能するためには発現される必要があるが……遺伝子発現は未知数なのだ。

発現したあとの調節によってその後の方向は無限といってもいい。（遺伝子発現とは、遺伝子の情報が細胞における構造および機能に変換される過程）

「しばらくは休業か」

ベリルは溜息を吐き出した。

それから1週間——フォージュリからの接触は無い。あれだけの殺意があったのだ、いつかまた仕掛けてくる。

こちらが先に見つけたとしてもどうすればいいのかは解らない。いや、彼は常に監視しているハズだ。こちらの動きを観察し仕掛けるタイミングを図っているのだろう。

「！」

そうしてふいに庭からプレッシャー。この威圧感は覚えている。
ゆつくりと庭に続く引き戸のカーテンを開く。そこにいたのは紛れもなく――

「……フォージюри」

青と緑が混ざり合う瞳で険しくベリルを見つめていた。開かれたガラス戸。フォージюриはさらに睨みを利かせるとベリルに一步、近づいた。

「殺してやる……」

止められない衝動。

「……」

肌がピリピリする程の殺意が伝わってくる。

「お前は私のコピーではない」

「黙れよ」

フォージюриはハンドガンを取り出す。それは『コルトM191

1』45口径のカートリッジが7発装てん出来るハンドガンだ。

彼のお気に入りなのだろう、使い込まれている事が窺える。

「……」

ベリルは目を細めた。彼の精神が壊れかけている。

もう、ベリルの声は聞こえないかもしれない……

「！？」

ベリルに銃口を突きつけて近付いたフォージюриの足下に鈍い音が響いた。地面の土がその衝撃で小さく舞う。

「？」

フォージюриは辺りを見回すが誰の姿も見えない。一步、また近づくと今度は靴にかすった。鈍い音はハンドガンに消音器サイレンサーを装着しているのだろう。

「……仲間か？」

「知らん」

ベリルも驚いている。自分の事を知っているのはカイルという彼の傭兵の師匠だけだが、彼にも今の現状は伝えていない。

「チッ」

フォージュリは喉の奥で舌打ちをすると、素早くその場を離れた。

「！」

追いかけようと思ったが牽制した相手が気に掛かり立ち止まる。

そこに現れた影は……

第2章　カナリアの歌

「大丈夫？」

爽やかな笑顔がベリルに向けられる。銀色の髪と鮮やかな海の瞳。

「……」

その瞳にベリルは怪訝な表情を浮かべた。どこかで見たような海の色。

白い建物の中、いくつもの水槽に沈められた何体もの――

「お前は……誰だ」

「僕はジーン。よろしく」

その名にベリルの心臓はドクンと血流を速める。ジーンと名乗った青年はその様子にニコリと笑った。

「僕は、あなたを殺そうだなんて思っていないよ。だって、僕を生み出した『オリジナル』なんだからね」

そう語った瞳はどことなく空々しくベリルには感じられた。

『^{ジーン}gene』それは『遺伝子』という意味を持つ。

サイレンサー付きのハンドガンを仕舞ったジーンを家の中に促しキッチンに向かう。彼はそんなベリルの後ろを、子犬のように追いかけた。

「……」

いぶかしげに見つめるベリルにニコリと笑いかける。

* 海の宝石

「彼と僕とは1つ違いだよ。もちろん彼は僕の事を知らない」

冷蔵庫を開け飲み物を取り出しているベリルにさらに続ける。

「クローン・プロジェクトはいくつも同時に行われていたんだ。その中で成功した者だけに、その後の教育が施される」

リビングのソファに腰掛けベリルが来るのを待つ。炭酸飲料の入られたグラスを2つ持ちリビングに足を向けるベリルを見つめて再び口を開いた。

「失敗作だけが、ああやって1つの部屋に集められるんだよ」

「！」

グラスをテーブルに置く手がビクリと反応した。

『失敗作』

その言葉はベリルの脳裏に1つの部屋を思い浮かばせる。

幼少の頃、一度だけ入った部屋は薄暗く幾つもの水槽が並べられていた。異形ともいえるその姿を小さなベリルは静かに見つめる。

己が生まれる前に何が行われていたのかを目の前の水槽が突きつけていた。

その中に一際、成長していた少年の姿……その瞳はジーンと同じアクアマリンの色だった。

「同じ細胞を使っているからって全てのクローンが発現する訳じゃないからね。僕だけが成功したってワケ」

「発現？」

聞き返しながらジーンの座っているソファの右斜めの1人がけソファに腰掛けた。

「全体的な能力の事でしょ」

グラスを傾けてベリルを指さす。

「彼は精神が破綻してる。戦闘には長けていたけど、ただの破壊衝動からだろうね」

その言葉にベリルはフツ……と笑った。ジーンはそれに付け加える。

「あ、父さんは違うからね。全てにおいて群を抜いてるんだから、あいつと同じじゃないよ」

「……」

ジーン言葉に眉をひそめた。

「……『父さん』？」

「そうでしょ。あなたの細胞から生まれたんだから」

ベリルから苦笑いがこぼれる。それに対して何も言う気は無いがどうもくすぐったい。

「先ほど教育と言っていたが」

ジーンに問いかける。

「僕についてた科学者たちが先生だったかな。だから父さんほどの知識は学んでないよ。フォージュリたちについてた科学者はみんなそれなりのレベルだから、不満を吐くしか知らなかったのさ」

ジーンは肩をすくめた。

「私に知らされていなかった事がこれほど多いとは」

小さく笑ったベリルに青年は足を組んでなだめるように発する。

「まあ僕たちは実験体だし。そういう部分を教える訳は無いよね」

ベリルはそれに違和感を覚えた。確かにそうだ、だがジーン言葉はまるで他人事のように聞こえる。

終った事に尾を引かないのはベリルもだが彼はそれよりもさらに外側にいるように思えた。

「心配しないで、あいつからは僕が守ってあげるから」

「……施設から逃げ出せたのだな」

「！ ああ。うん」

襲撃を受けた時、生き残りはいないと思っていた。

例え知らされていなかった計画の人間たちでも生き残りがいた事にベリルは少し嬉しかった。

「科学者を盾にして逃げたから」

「!」

しれつと応えたジーンに切れ長の瞳を丸くしたベリル。

彼はさらに平然と続けた――

「自分が助かるためだもの」

「……」

ベリルは何も言えずに青年を見つめる。それは間違いではない。

助かるために生物がする自然の事だとも言える。彼が驚いたのはその部分ではなかった。

ジーンの言葉からは、相手に対する情が何1つ感じられなかったのだ。それは造られた情も育ててくれた情も憎しみという感情すらも何も見あたらない。

『ただそこに物体があつた』

ベリルにはそう聞こえた。

「……何故、私を守ろうとする」

その問いかけに今度はジーンが驚いた表情を浮かべる。

「言つたでしょ。あなたは僕の親なんだ。それに仲間だ」

「仲間……?」

「そう。同じ『成功作』というね」

人形のような笑顔。ジーンは……命というものには興味がないのだ。ベリルは視線を外した。

「必要ない」

「へ?」

ベリルはつぶやき聞き返したジーンに繰り返した。

「必要ない」

はつきり聞こえた言葉にジーンは数秒ほどベリルを見つめて黙り込んだが薄く笑ってグラスをテーブルに置き、静かに立ち上がった。「あなたに選択権は無いよ」

言つて素早くベリルの腰掛けているソファの背もたれに左手を突いて顔を近づける。少し驚いたベリルを見据えて突いた手を回し背もたれに肘から先を乗せた。続けて左膝も肘掛けに乗せる。

「僕に生きる意味を与えてくれよ」

「……」

狂気じみた瞳。冷たい海の色がベリルを深淵に引きずり込もうとする。フォージュリもジーンも知らない。

彼が不死だという事を――ベリルはそれを伝えるべきか考えあぐねた。

夕暮れになりベリルは夕飯の準備を始めた。不死になってから食欲というものは消え失せたがジーンに作らない訳にはいかない。どのみち、まだ不死だと語れない今は食べて隠す必要もあった。

『食を味わう』という行為も嫌いではない。ジーンは子どものように目を輝かせベリルの手元を覗く。しかし身長はベリルよりもやや高い。

「父さんはアジア人の特徴が身長に出たんだね」

慣れない呼ばれ方にまた苦笑いが浮かぶ。

「……」

手際よく調理を進めるベリルを見つめジーンはおもむろに発した。

「まだ、僕を信用してないんだろ？」

「……」

ベリルの手が止まる。

「それでも背後にいさせてくれるっていうのは、余裕から？」

「……」

ベリルは右後ろにいるジーンを一瞥し調理を再開した。

「攻撃するならとつくにやっている」

「まあね」

*せめぎ合い

「ねえ。知ってる？」

ジーンがベリルの作った料理を食べながら口を開いた。チキンゲリルとライス、サラダが1つの皿に乗せられている。

「父さんから作られたクローン全て男性なんだって。しかも生殖能力が欠如してる」

「！」

その行為を楽しむ事は出来るが子孫を残す能力は無い。

「女性は1人も生まれなかったらしいよ。面白いよね」

牽制するような眼差し。コンソメスープにスプーンを沈めてジーンはひと口すすった。何も言わないベリルに目を向けてクスツと笑う。

「今、同じ事考えたよね」

「……」

「カナリアの一代雑種。Mue^{ミュー}の事」

さえずりの美しいアトリ科の野鳥のオスとカナリアのメスとの交雑。生殖能力を欠くので基本的に一代限りだ。日本ではハイブリッドと紹介される事が多い。

「もつと面白いのがクローンのクローンを作ろうとしたけれど、どれも成功しなかった」

「……」

ベリルは眉をひそめる。

「細胞の核においても一代限りって訳さ」

静かに食事を進めるベリルをジーンは見つめた。

「自分のコト少しは調べてるんでしょ？」

「……」

ベリルは応えない。

「まあいいけど」

ジーンは食べ終えた食器を流しに運び冷蔵庫を開いた。

「あ！　なんかある。これ何？」

ジーンが取り出したのはカスタードムース。客が来ると甘いモノも作ってしまうクセでつい作ってしまった。

ジーンは嬉しそうにそれを2つ取り出してスプーンも同じ数を手にとった。

「はい」

「……」

子どもじみた瞳をベリルに向け手渡す。渋々受け取り食べ始めたベリルをジーンはスプーンを噛んで見つめた。

「？」

ベリルが怪訝な表情を浮かべるとジーンは嬉しそうに発した。

「父さんて綺麗だね」

「！　そうかね？」

時折、言われる事だがベリル自身にとってはあまりピンとこない言葉だ。自分の容姿について彼は気にした事も確認した事も無い。はつきり言えば自分についてまるで興味が無い。

「クローンって、みんな顔が同じだと思ってた」

ジーンの言葉にベリルはさして驚きもせずにムースを口に運んだ。「同じなのは性格が形成されるまでだ。ベースは同じでも環境や個人の性格が違えば変わってくる」

「！　へえ……じゃあさ、時々だけど凄く似てる人とかいるじゃない。あれは？」

「環境や性格で違ってくるのだ、その逆があっても不思議ではなからう」

しれっと応えた言葉にジーンは思わず吹き出した。

「それ、本気で言ってるの？」

「……」

ケラケラと笑うジーンの顔をベリルは見つめる。

確かによく見ればベリルと同じ顔だ。だが、その人の持つ雰囲気

と存在感は同じではない。

髪色も目の色も受け継がなかった。それはフォーgeriesも同じ事。知ってる？ エメラルドは作れないんだってさ」

挑戦的な瞳がベリルを見据える。

「水晶とかダイヤモンドとかは人工的に作れるけど、エメラルドだけは人工的に造ったとしても偽物でしかない」

何を言いたいのか……ジーンのアクアマリンの瞳がベリルを映し出す。

「イミテーションは所詮、イミテーション。僕もフォーgeriesもね」

「1人の人間である事に代わりはない」

「そうだね」

笑っているが同意はしていない。そんな視線がベリルに向けられた。

「でも……」

ジーンはニコリと笑い軽く言い放つ。

「綺麗な父さんのコピーなら、なんか嬉しいな」

「……」

ベリルはその言葉に無言で目を伏せた。

「！」

その夜——ジーンに部屋をあてがいベリルは自分の寝室で寝る準備を始めていた。そこにノックの音が聞こえドアを開くとジーンが立っていた。

「！ 父さんて寝る時も服なんだ」

パジャマを借りて着ているジーンはベリルの姿に驚いて笑いながら発した。それには心えずベリルは怪訝な表情を浮かべる。

「どうした」

「……」

ジーンは部屋の中を一瞥しベリルに目を移すと少年のような笑顔を見せた。

「父さんの隣で寝ていい？」

ベリルはしばらく無言でジーンを見つめたが小さく溜息を吐き出し中に促す。

「ありがとう」

言って、ベリルが寝ると思われるベッドの隣にあるもう1つのベッドに腰を落とす。その手にはしっかりと自分の武器を持っていた。それをナイトテーブルに乗せベッドに寝ころぶ。

「おやすみなさい」

「……おやすみ」

次の朝――

「なんだよお前……」

フォージュリが再び中庭に姿を現しベリルの隣にいるジーンを睨み付けた。

「失敗作が何してんの」

「なんだと……」

あざ笑うようなジーンの表情にフォージュリの拳が強く握られる。

「よせ」

ベリルが制止するように1歩、前に出るがフォージュリはそれに体を強ばらせた。

「……私は何もしない」

「うるさい」

「無駄だつて。こいつは精神が破綻してる」

「俺は破綻してない！」

声を荒げるフォージュリにジーンは彼を指さして鼻で笑った。

「それがかい？ あんたは失敗作。僕は成功作。解るだろ」

「！？」

ジーンの言葉にフォージュリは愕然とした。

「どういう意味だ！？」

初めて聞かされる事実にとらりと腕を垂らしジーンを凝視する。

「僕は成功した唯一のクローンだよ。君は失敗作」

「そんな馬鹿な！」

吐き捨てるように言ったフォージュリにジーンは笑って口を開く。
「仮にも『親』である相手に憎しみで刃を向ける人間が成功だと言えるかい？ 君は精神異常だ。だから失敗とみなされて他の失敗作と同じ場所に置かれた」

「違う！ 違う違うっ！？ 俺は成功作だ！」

フォージュリは激しく頭を振った。

「認めなよ。そして死にな」

「！？」

「！ どいてよ父さん」

「よせ」

ジーンが腰の後ろから取り出したハンドガンの前にベリルは立ちその瞳を見据えた。

「……ふざけんな」

「！？」

瞬間、フォージュリから聞こえた小さな音にベリルはとっさに身をよじった。サイレンサー付きのハンドガンから放たれた弾丸は地面に当たる。

「チッ」

「しつこいね」

「ジーン！」

走り去るフォージュリに引鉄を引くジーンのハンドガンをつかみ取り苦い顔をした。

第3章　混ざり合う思考

ベリルからハンドガンを奪い返すように手に取るとジーンは溜息を吐き出す。

「いつまで偽善者を決め込んでるの」

「……」

ベリルにそんなつもりは無かった。ただ、この場所での銃撃は避けたい。ジーンにとってはそれすらも無駄な行為なのだろう。

「まあいいや。父さんのしたいようにすればいい」

ハンドガンを仕舞いながらジーンはニコリと笑いかけた。

「お腹空いた。何か食べたい」

先ほどの緊迫感は消え去りジーンは子どものようにねだる。

「……」

ベリルは小さく溜息を漏らし朝食を作るため家の中に入っていた。

ふと、去り際のフォージュリの表情を思い起こす。

あれは……妬みにも似た目だった。

*わき上がる感情

このままここに居続ける事は難しい。ベリルはしばらく住宅街から離れる事を考えた。決めれば早い、ベリルは準備を始める。

「！」

それを見てジーンは口の端をつり上げた。やっと動き出したベリルを感心するような顔だ。

住宅街という事で2人にも躊躇が見られるかと思えばまるで気にしない。仕方なくベリルは移動する事を決めたのだ。

2人の持っている感情は違えどベリルに固執しているという部分では同じだった。

「どこに行くの？」

「バリングラ」

「！ ああ、マウント・オーガスタスね」

西オーストラリア州カーナボンから東に約450kmの地点にある世界最大の一枚岩。周辺はマウント・オーガスタス国立公園になっている。7月から10月にかけてワイルドフラワーが咲き乱れる。

『バリングラ』とは、先住民アボリジニのワジャリ族の言葉である。

「そんなところに行くなんて父さんも物好きだね」

「……」

ジーンの声全体で捉え聞き目を細める。

12年前、逃げた先で初めて出会った人間はカイルという傭兵だった。オーストラリアが好きなカイルの影響でベリルもこの大地を愛するようになった。

隅から隅まで歩き尽くしたベリルは人がほとんど来ない場所も知っている。フォージュリと話し合う落ち着いた場所が欲しかった。ベリルにとってはこれは無駄な殺し合いだ。争い合わなくて済む

のならそうしたい。

「彼を説得しようとしてるなら無駄だよ」

「！」

静かに背後から放たれる言葉にゆっくりと振り返る。

「それが解っていてどうしてまだ抗うの？」

「……」

ベリルは無言で目を伏せた。

「今まで何人も殺してきたんでしょ？　なのにどうして彼を生かそうとするの？」

「それとこれとは別の話だ」

答えたベリルにクスツと笑う。

「自分1人だけが生き残ってしまったと思っていたから僕らが生きていて嬉しかったんでしょ」

「……」

「だから殺したくない」

ジーンはそう言ってベリルを見つめた。

「そんなのあいつに伝わる訳もないのに」

「解っている……」

苦い顔をしてまとめた荷物をオレンジレッドのピックアップトラックの荷台に積み込む。

「もう、僕の邪魔しちゃだめだよ」

「！」

感情のない声でジーンは発した。

「当たっちゃったら嫌だからね」

「……」

「ウソだ……俺は失敗なんかじゃない……」

フォージュリはつぶやきながら木々の生い茂る公園をフラフラと歩いていた。

「俺は成功だ……失敗はあいつだ」

同じ言葉を繰り返し繰り返し呪文のように唱え続ける。薄汚れたサンドカラーのカーゴパンツに草色のアサルトジャケット。

強い日差しを避けるために訪れていた住民は、その異様な雰囲気
を放つ青年を遠くから見つめた。

フォージュリはしばらくそうやって公園をうろついていたが警官
の姿に素早く身を隠す。

「……」

住民の通報でかけつけたであろう2人の警官を草陰から見やりそ
の場から離れた。我に返ったフォージュリはジーンの言葉を思い返
し唇を噛みしめる。

「ジーンと言ったか……あいつ」

フォージュリはジーンの言葉に過去を思い起こす。

物心ついた時にはすでに周りには同じくらいの子どもがいた。覇
気もなくなただうつつむいているだけの奴から、やたらとうるさい奴。
そして白衣を着た陰気な7人ほどの科学者たち――ディスプレイ
に映し出されている少年に目を輝かせ羨望せんぼうの眼差しで語り合ってい
た。

「……」

フォージュリは自分よりもやや年上に見えるディスプレイの少年
を見つめる。対面した事の無いその少年に何故か心臓がドクンと鳴
った。

口々につぶやいている科学者たちの言葉でその理由を知り憎し
みがふつつつと湧き上がった。

俺の何がいけない……何がだめなんだ。どうして俺を見ない。

「ああ……どうして私たちはクローンなんだ」

うるさい。

「しかもこんな……」

うるさいんだよ。

「所詮は別物だ」

だったら消してやる……全て、キサマらごと——！

「何が違うつていうんだ。俺とあいつの何が！」
声を上げ側の木を殴りつけた。

「……」

荒い息を整え宙を睨み付ける。

そしてフォージュリの脳裏をかすめたのはベリルの側で笑っていたジーンの姿。あのニヤけた顔を思い出す度にフォージュリの心に言いようのない感情が湧きだして来る。

「俺が失敗作……？」

そんな訳があるものか。しかしジーンを初めて見た事でフォージュリは己の存在がさらに揺らいだ。

あいつもクローンなのにどうして俺たちと一緒にじゃなかった？

あいつだけ特別だったのか？ 何故だ。

「……」

そして何の警戒も示さずにいたベリルに眉をひそめる。隣にクローンがいるのに！

たどり着かない答えに辺りは夕闇が迫っていた。どこからともなく聞こえる夜の鳥の鳴き声がさらなる暗闇を呼び、ひっそりとした公園にフォージュリの碧い瞳が輝く。

「……殺してやる」

闇に染まっていく空間を見つめ小さく発した。

* 虫はささやく

ベリルは荷物を積み終わり運転席に乗り込む。ジーンは助手席に腰掛けシートベルトを締めた。

「……」

バリングラに向かう車の中ベリルは幼き頃の記憶を思い起こす。薄緑の高い塀に囲まれた白い建物。森の中に建てられていた国家機密の遺伝子研究施設は、その広大な敷地にひっそりと身を潜めるようにそこにあった。

周囲を軍の特別施設だとして立ち入り禁止にし侵入者を厳重に取り締まっていたのに……何故ベリルが15歳の時はギリギリまで気付かなかったのだろうか。

「内通者がいた」と考えるのが普通だ。しかしそれを確かめる術はもう無い。

あの襲撃で唯一の成功例の姿は確認出来ずデータも全て灰となつたため、国は施設を取り壊し今ではただの森になっていた。

残されたごくわずかなデータだけは『機密情報』として国の管理するコンピュータの中に埋もれている。

物心が付いたのはいつだったろう……気が付けば科学者たち10人の名前はすでに覚えていたと思う。

国からの年に1度の視察に来る人間たちはベリルを人として扱わなかった。品種改良を重ねた犬や猫のように見つめてあざけりの名を呼んだ。

『天才少年』に多くの知識を学ばせるため、あらゆる専門家たちが呼び出され少年の正体も知らぬまま襲撃の理由も解らぬまま……彼らは敵に殺された。

あの施設にはベリルの知る限りでは警護も含めて300人がいた。ベリルはその全ての人間の名前を覚えていた。

施設から去る時、遺体の1つ1つに小さな花を添え別れを告げて

……確かにベリルは愛されていた。彼はそれを肌で感じていたのだ。愛情表現のヘタな科学者たち。そして少年の存在感に怯えながらも彼に愛情を注いでくれていた専門家たち。その全てを彼は今でも覚えている。

しかしクローンまでは予想していなかった。施設を全て回ったが違和感のある場所は無かったように思う。

「！」

そこで気が付いた。違和感が無いのは当たり前かもしれない。と……ジーンの話によるとこの研究が着手されたと同時にクローン計画は持ち上がっていた。計画に必要な人材と施設は彼が誕生した時に造られ1歳の時にクローン計画が実行された。

そしてベリルが5歳の時にフォージュリが生まれ次の年にジーンが産まれた。何体のクローンが造られたのだろうか。

ベリルが物心つく前からすでに実行されていた計画——初めからそこにあるものに誰が違和感など覚えるだろうか。

ベリルは科学者でもなければ国の関係者でもない。実験で生まれた生物に全てを語る訳も無い。

「……」

ベリルは薄笑いを浮かべた。今更に自分が何者なのかを思い知らされ突きつけられる。

「ジーン」

「何？」

「クローンに携わっていた者の人数は解るか？」

その問いかけにジーンは人差し指を口元にあて視線を上げて少し考えた。

「確か……バグチームは教育係を含めて20人くらいかな？ 僕の方方は5人くらい」

「……バグ？」

ベリルはその言葉に眉をひそめる。ジーンは悪びれる事もなく笑顔で応えた。

「みんなそう呼んでたよ」

bug^{バグ}とは英語で虫の意だが、転じてコンピュータプログラムの製造上の誤り・欠陥を表す言葉である。

『失敗作』をまとめるチームだからか……ベリルは奥歯を噛みしめた。

何が失敗で何が成功かなんて解らない。果たして私は本当に『成功』だといえるのか……？

『個人を特別に愛する』という感情を持ち合わせていない私が……」

ベリルは苦い表情を浮かべた。

「それ以上、何を望むの？」

「！？」

ぼそりと言ったジーンの言葉に喉を詰まらせる。考え込んだベリルの思考をジーンは読み取り冷たい言葉を浴びせた。

「どうして自分は成功作だと認めないの？」

感情を持たない人形のような瞳でベリルを見つめた。

「……」

ベリルは何も言えずにその夜は車の中で眠る事になった。

ジーンは後部座席でベリルは運転席のシートを傾けて目を閉じる。

ベリルの脳裏に響く声――

『それ以上、何を望むの……？』

『俺たちには何も望めないのに』

『何もかも完璧なくせに……』

「違う！」

ベリルの声は闇夜に吸い込まれるように消えていく。

虫たちのささやき――彼の知らない処で繰り広げられていた生命の探求。

ベルハース教授も知っていたのだろうか……それを止めてくれはしなかったのだろうか……彼もまた、国に翻弄された科学者の1人

に過ぎない。それを解つていてもそう思わずにはいられない。

「……」

ベリルはそのエメラルドの瞳をまぶたに固く閉ざし己の体を抱きしめた。

最終章　その名は永遠に……

「追ってくると思う？」

「……」

当然の応えに対する問いかけにベリルはジーンを一瞥した。

「！　ああ……感じてるんだね。後ろにある気配」

さほど勾配こうはいのない荒野が広がるオーストラリア。振り返っても車の影はない。それでも彼の持つ独特の気配をベリルは感じ取っていた。

遠ざかることもなく一定の距離を保ちながら追ってくる気配……からみつく憎しみの感情。

もうしばらく走り続ければバリングラにたどり着く。

精霊の息づく大地——その広大な大地は厳しさと優しさを同時に伝える。

「……」

ジーンはベリルの横顔をじつと見つめた。

無駄な事を何故、続けるんだろう？　どうあがこうとフォージュリから憎しみを取り去る事など出来ないというのに。半ば呆れてジーンは外の風景に目を移した。

＊終焉の予兆・しゅうえんのよちよう・

3食の食事以外は車を走らせるベリル。途中にある街などで給油と買い物をして少しばかりの休憩をとった。

その体力に感心するジーンだが、いざフォージュリと対峙した時の体力は残っているんだろうか？ と心配にもなる。

そんな事を考えた深夜、練炭と薪をくべて星空を見上げるベリルに――

「!？」

突然の敵意が背後から放たれベリルは素早く振り返った。

「……っ！ ジーン？」

「勘が良いね」

冷たい瞳のジーンがナイフをベリルに振りかざした。

「どういう事だ」

押さえた左腕から鮮血が流れる。それを薄く笑って見つめたあとジーンは静かに口を開いた。

「あいつの相手は僕がするから、父さんは大人しくしててよ」

「!」

眉間にしわを寄せたベリルにジーンは付け加えた。

「どうせ邪魔するんでしょ」

だから怪我をしてもらうよ。

「なんだと……？」

「僕があいつを殺そうとすれば父さんは必ず邪魔する。だから少しの間だけ動けないようになって欲しいんだ」

「殺し合いをするために行く訳ではない」

「解ってるよ。でも無駄だって」

あいつに説得なんて意味無い。ジーンはそう言ってベリルを見つめた。

「! ……？」

そしてジーンはふと気付く。ベリルの腕に――

「なんで……血がもう止まってるの」

「!？」

ベリルは“しまった!”と、視線を逸らした。

「どういう事? 隠さないで教えて欲しいな」

「……」

ベリルは観念したように押さえていた手を外す。

「!？」

その傷口をジーンは凝視した。

「うそ……」

そこにあるはずの切り傷が跡形もなく消えていた。

「不死だって!？」

ベリルから聞いた言葉にジーンは二の句が継げない。

ただでさえ信じられない存在である自分たちであり、その親玉と言ってもいいベリルが不死になっていた。

これが驚かずにいられようか――!

「私自身、驚いているよ」

ベリルは不死になった経緯をゆつくりとジーンに語り始める。

25歳の時に出会った少女が持っていた『不死を与える力』……

ただ1度きりのその力でベリルは不死となった。

彼女も使いたく使った訳じゃない。使わざるを得ない状況だった。

「……」

聞き終わったジーンは静かにベリルを見つめる。そして小さく笑った。

「なんだ、じゃあ僕が必死で守らなくてもいいんだね」

「……」

ベリルは当惑したような表情を浮かべる。

「生きる意味を与えてくれ」と言った彼からそれを奪う気がした。

しかしジーンはニコリと子どものように笑う。

「やっぱり父さんは凄いな」

「！」

ジーンは両手を少し広げ半ば恍惚とした表情を浮かべた。

「まさに神が創り出した芸術品だ」

「……」

それにベリルは眉をひそめる。施設にいた頃、国の上層部から送られてくる年に1度の視察員の中におかしな男がいた事を思い出す。視察員はいつも同じ人間とは限らなかった。ベリルが6歳の時に視察に来た男は彼が怪訝に感じるほど異常だった。

彼を見下す他の視察員とはまるで逆の態度をベリルに見せたのだ。灰色の髪と同じ色の瞳に端正な顔立ちの20代後半の青年。

自分で付けた名前を彼を呼び丁寧に話しかけてくる。

ベルハースがいぶかしげに思いその青年に注意を促すと彼は語気を荒げて半ば叫ぶようだった。

ベリルは目の前で聞いていた訳では無かったが通路で教授にまくし立てている青年の横顔は狂気を宿していた。

あの時の青年の言葉――

「お前たちは本気で自分たちの成果だと思っているのか!? 馬鹿者どもめ! 彼は神が創り出した神のための存在だ!」

目の焦点は合わずどこを見るときもなくその青年は両手を大きく天に広げ語り続けた。

「神がお前たちの手を借りてこの世に生み出した神の恋人だ! 彼には執着心が無いと言ったな、それは当たり前だ! 神はルシフェルで懲りている。それならばいつそ愛する心など無くせばいい」

ベルハースはその青年の表情に不安を覚え警備員を呼び寄せた。

「見ているがいい! いつか神は彼を迎えに来る。キサマたちは用無しだ!」

狂信的な言葉を叫び続け警備員の手を振り払い通路の角でじっと無表情に見ていたベリルに気付き足を向けた。

「見ろ！ この美しい瞳を！ 神が彼のために与えたエメラルドだ！」

そう言っ てベリルに手を伸ばす。

「……」

その手をベリルはじつと見つめていた。寸での処で青年は警備員に押さえられ次の年は別の視察員になっていた。

あの時の彼のセリフは馬鹿げている。ベリルは今でもそう考える。神の存在にではなく己が神に創られたという部分にだ。ベリルはそこまで自分を確たるものであるとは思えなかった。そして許されるべき存在でもない。

「ジーン……」

「何？」

「解つたなら私を守る必要は無い」

「守るよ」

目を細めたベリルに彼は感情のない声で発する。

「そうやってあいつを殺さずにいるのはどうだろうね？ あいつが死ぬまで逃げ続けるつもり？」

そんなの冗談じゃないよ。ジーンは笑みを見せつつその瞳に怒りを灯していた。

「そんなの僕が許さない。僕の時間まであいつに奪われるって事じゃないか」

折角こうして父さんと一緒にいられるのに……

「お前がそのつもりなら私はお前の前から消えよう」

「！？」

その言葉にジーンは目を見開いた。

「……本気で言ってるの？」

「私の言う事に従えないのならそうする他はない」

途端にジーンは涙をためて体を震わせる。

「嫌だ……父さんと離ればなれになるなんて嫌だよ」

「ならば私の指示には従え」

「言うこときくから僕を1人にしないで」

ジーンはベリルにすがりついた。

「……」

ベリルはすがりつくジーンを一瞥し荒野を見つめた。

フォージュリを殺す事も殺さない事も……正しくそして間違っている。どちらの選択が正しいのかは解らない。ただ、時間が欲しかった。

明日の朝、車を数時間走らせればバリングラに到着する。

答えは——まだ出ない。

* 遺伝子の闘い

「俺が失敗作だと……？」

フォージュリは怒りの形相でジーンを睨み付ける。

太陽は3人の影を短く形作り荒野に吹く風はからみつくように肌を滑っていく。

「そうだよ」

「ジーン」

ベリルが相手を刺激するなど制止するがジーンは続けた。

「事実をちゃんと言ってあげないと」

「……」

フォージュリは険しい表情をジーンに向け口を開いた。

「どうして……貴様がオリジナルの隣にいるんだ」

「へ？」

予想しなかった問いかけにジーンはキョトンとする。

「フォージュリ、この闘いに意味は無い。殺し合う必要は無いはずだ」

ベリルの言葉も聞こえないかのようにフォージュリはジーンを睨み付けた。

「やだなあ、僕も父さんも成功した仲間だもん。一緒にいるのは当然でしょ」

「……成功した仲間？」

その言葉に反応しベリルを見やる。

「だからそいつとは一緒にいるのか？」

「そうではない」

「そうに決まってるでしょ」

「きさまあ！」

フォージュリはナイフを抜いてジーンに突進した。

「！？」

全ての怒りがジーンに向けられている。ベリルはジーンの前に立とうとしたがジーンは薄笑いを浮かべて右に駆けていった。

「ジーン!?」

「いいよ、相手してあげる」

ゲームでも始めるかのように発しナイフを取り出す。そしてフォージュリの刃を受け止めながらベリルを一瞥した。

「邪魔しないでね」

「……っ殺してやる」

「それはこっちのセリフだよ」

失敗作がうるうるしてるんじゃないよ……。フォージュリにしか聞こえない声であざけるように言い捨てた。

「許さない……」

フォージュリの怒りが吹き出す。

「……」

ベリルは2人の激しい闘いに身動きが出来ずにいた。割って入る事は可能だ。しかし足が動かない。

すくんでいる訳でも無い——なのに何故か足は動いてくれなかった。まるで鎖につながれているような、別の大きな力に縛り付けられているような……

「上手く逃げ出せたんだから、そのまま生きて行けばいいじゃない」

「うるさい! 俺は……オリジナルになるんだ……」

「父さんや僕が死んだってなれる訳ないでしょ。あんたも僕もコピーはコピーなの」

「違う! 俺はコピーなんかじゃない!」

「そつだ……コピーなどではない」

ベリルは2人のやりとりを見つめぼそりとつぶやいた。

「代わりでも無いのだ……お前たちは、1個の、ただ1つの存在だ」
その言葉はフォージュリには届かない……それはあたかも、遺伝子が争い合っているようにベリルの目に映った。

「隣にいるのは俺だ!」

「!？」

フォージュリの口から聞こえた言葉にジーンもベリルも目を見開く。

「は……」

ジーンは呆れたように笑って目を据わらせた。

「おまえ、どつちななの？」

「貴様なんかに……渡さない」

“父さん”の隣を――!

「……フォージュリ」

「ク……クク。やっぱり破綻してる」

「黙れ!」

「! ジーン下がれ!」

フォージュリの動きにベリルは違和感を覚え声を張り上げた。

「!？」

「誰にも渡さない……」

フォージュリはジーンの手首を掴み腰にある起爆スイッチに視線を落とした。アサルトジャケットで見えなかった爆薬が一瞬の強い風に姿を現す。

「父さん!」

ジーンは残った手でベリルに必死に手を伸ばした。

「ジ――」

駆け寄ろうとしたベリルの目の前で爆発と衝撃波に砂煙が高く舞う。

「……」

風が砂煙を払いそこに2つの横たわる影。

「フォージュリ! ジーン!」

先にフォージュリに駆け寄ったがその姿は生死を確認する意味を成してはいなかった。

「……っ」

苦い顔をしたベリルの耳にジーンのうちめくような声。

「！ ジーン」

「う……」

フォージュリがスイッチを押す直前に掴まれていた手を振り解いたが爆発に巻き込まれた。

だが……それだけのダメージではない事が胸から染み出る赤い液体で解る。

「ジーン……」

フォージュリはスイッチを押すと同時にハンドガンを抜いて逃げるジーンの背中から心臓に銃弾を放った。

命中はしていないようだが致命傷である事は間違いなかった。

「父さん……どこ？」

ジーンは必死に震える手でベリルを探した。その手を掴みアクアマリンの瞳を見つめる。

「ジーン……」

「僕は、父さんしかいない。父さんに愛されたかったんだ……」
あいつらは意地悪だ。

「勉強なんか、嫌いだ。どんなに勉強したって、父さんに会わせてくれないじゃないか。酷いよ、約束したのに」

誰かが施設を襲って外に出られた。

「これでやっと父さんに会えると思ったのに……父さんはどこにもいなかった」

寂しくて、悲しくて、必死に探した。

「僕は……父さんを、守るんだ」

見下ろすベリルの頬に震える手を添える。そして見つめるエメラルドの瞳にいつもの笑顔を向けた。

「父さん、父さん……」

ジーンの瞳から涙がつたう。

「……」

ベリルはジーンを抱きしめた。消えゆく命を必死に留めようと強

く抱きしめる。徐々に冷めていく体温が死を確実なものにしていく。
「……あは」

ジーンは、子どものような笑みを浮かべた。

「やったね」

「!？」

「父さんにギュッてしてもらっちゃった」

「……っ」

そしてベリルの腕にズシリと重さが伝わる。見開かれたジーンのまぶたをゆっくりと閉じてベリルはつぶやいた。

「これが……結果か」

まるで『イミテーションですらも許さない』とでもいうように2つの命はことごとく失われた。

それはあたかもプログラムされた細胞の死——『アポトーシス』のように慈悲も無く、ただ淡々と行われるシステムのごとく……

「……っはあ」

怒りをぶつける先も哀しみを吐き出す事も出来ないベリルは大きく息を吐き出した。血塗られた己の手を見つめ血に染まった体を確認するように見回し、ベリルは薄笑いを浮かべた。

「クク……」

逃れられない自分の運命に笑ったのか泣く事の出来ない反動なのかは解らない。ベリルは青い空を睨み付けるように、しばらくそのまま見上げていた——

落ち着くとベリルは2人の遺体を埋葬した。

「……」

埋葬し終え深い溜息を吐き出す。喉を詰まらせまぶたを閉じて頭うぶを垂れた。頬を滑っていく風にまぶたを開き眼前に広がる大地に目を細める。

大地は、その命を後に伝えていくだろう……ここにもワイルドフラワーがいつか咲き乱れる時が来る。

その頃には、私は笑って色とりどりのその花を眺められるだろう
か……

E
N
D

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1359r/>

プログラミング・デス

2011年8月30日03時24分発行